

日露戦争百周年 サンクトペテルブルグ国際会議

平 岡 洋 一

日露戦争百周年会議の概要

三月一八日から二二日までサンクトペテルブルグで山梨学院大学が国際交流基金の支援を受け、ロシア海軍中央博物館（分館の革命記念艦「アウローラ」を含む）、ロシア科学アカデミー東洋学研究所やサンクトペテルブルグ大学の協力を得て、日露戦争百周年を記念する国際会議を開催した。参加者は日露英中比の五か国から約四〇名であった。

第一日目はロシア海軍中央博物館中央ホールで行われ、博物館館長E・H・コルチャーギン中将、山梨学院大学学長代理の我部政男教授の挨拶、次いで開戦前夜のセツシオンが

コルチャーギン海軍中央博物館長の司会で、山梨学院大学教授コンスタンチン・サルキンソフ氏の「日露戦争は回避できたか？ 開戦前夜の東アジア情勢」、ロンドン大学名誉教授ジャンネット・ハンター氏の「開戦前夜の日露経済」が発表された。

第二セツシオンの日露戦争の部は、ロンドン大学名誉教授イワン・ニツシュ氏とサルキンソフ教授の司会で、東京大学名誉教授和田春樹氏の「日本における日露戦争についての研究動向」、ロシア国立公文書館長ウラジミール・ソブレフ氏の「ワリヤーグ」と「コレーツ」の受難と救助、熊達雲氏（中国人・山梨学院大学教授）の

授）の「中国メディアからみた日露戦争」と、リカルド・ホセ氏（フィリピン大学教授）の「日露戦争とフィリピン」、我部政男教授の「写真に見る日露戦争」、ロシア海軍中央図書館研究員ウラジミール・アンドリエニコ氏の「日露戦争下のシベリア鉄道とバイカル航路」、中央海軍博物館研究員セルゲイ・クリモフスキー氏の「日本海軍が敷設した機雷で、旅順港外に爆沈した『ペトロパウロスク』をめぐる考察」、ロシア海軍公文書館副館長マリナ・マレヴィンスカヤ氏の「日記にみる日本軍のロシア人捕虜」などの論文が発表された。

第二日目のセツシオンは革命記念艦「アウローラ」で私の司会で行われ、海軍博物館首席研究員コンスタンチン・グバー氏の「日本海海戦に於けるロシア将兵の運命」と、「アウローラ」艦長ゲオルギ・アブラー

モフ少将の「アウローラ」と日露戦争遺族会の活動」、次いで「三笠」保存会副会長の沖為雄元海将の「三笠」の歴史と「三笠」を通じた日露交流の現状」が紹介された。

元海上自衛官として特に共感と同情を覚えたのは、グバー氏の「日本海海戦に於けるロシア将兵の運命」であった。バルチック艦隊には約一〇〇〇名の士官が乗艦していたが、病気などで死亡あるいは病院船に移され、あるいは補給艦艇乗組のため上海などに回航され、日本海海戦に参加した士官は六六八名であった。そして、海戦に参加した士官の三分の一の二一三名が戦死し、二分の一の二九七名が捕虜となった。生存者や捕虜となった四五五名は帰国後に再び軍務に帰したが、三、四年後には一二七名が負傷や病気で海軍を去った。

残りの士官は第一次世界大戦で再

び戦ったが、大戦後期に革命が起きると、貴族など上流社会出身者の多い海軍士官は、白軍としてレーニンの革命軍と戦った者が多かった。このため革命政権が樹立されると、ロジェストウェンスキー中将など一〇六名が国外に亡命し、さらに残った士官も一九三八年から三九年の粛軍により二〇名が粛清されたという。同じく祖国を愛し第二次世界大戦を戦い、敗戦後に公職追放令を受けて職を失った父を持つ私には、ロシア海軍士官の苦難の歴史が自身の体験と重なるだけに胸の痛み報告であった。

次いでポーツマス講和のセツシオンはサルキンソフ教授の司会で、イアン・ニツシュ氏の「講和条約の履行」一九〇五年十一月と十二月の北京会議、「法政大学教授・下斗米伸夫氏の「ポーツマス講和」戦後における日露関係一九〇五―一九一七年」

の論文が発表された。

午後には本会議で最も注目されていた「アウローラ」艦長アブラーモフ少将と「三笠」保存会副会長沖元海将のスピリットと記念品の交換が、また、日露戦争で戦没した遺族や捕虜の子孫の代表、さらにはバルチック艦隊司令長官ロジェストウェンスキー中将の曾孫ジジ・スピーチンスキー氏兄妹と、東郷平八郎元帥の祖孫の保坂宗子氏夫妻と、日露戦争百年後に曾孫同士の歴史的和解の握手があった。

それが終わると日本側代表団は、サンクトペテルブルグ大学に移動し、日本語を学んでいる学生を対象に保坂氏が「ロシアと日本を結ぶ心」（本誌七頁参照）の講演を行った。

最後の会議は社会思想史博物館（旧レーニン革命記念館）の錦絵的な絵画（戦意高揚のための絵・写真参照）の特別展示室で行われたが



自国の勝利を誇張する絵画が多く、題材や表現など「日本と変わらぬ」どの印象を受けた。ここでの会議は日露戦争が与えたインパクトを中心に山梨学院大学助教授・小菅信子氏の司会で、私が「日露戦争の世界史的意義」「アジア主義・共産主義・モンロー主義の百年」、東京女子大学教授・黒沢文貴氏の「戦勝のインパ

クト 国際環境の変化と日本の軍部」、山梨学院大学教授・松本武彦氏の「日露戦争と日本の民衆・戦勝もたらしたもの」が発表された。私は日露戦争の日本の勝利がアジアやアラブ民族に人種平等、民族国家独立の夢を与えたが日本は第二次世界大戦に敗北した。しかし、引き続いて米ソ対立の冷戦が始まると、ソ連が日本が掲げた民族国家独立運動を支援し、アジア・アフリカに多数の有色人種の国々を独立させたこと、共産党独裁による内乱や反対派の弾圧や亡命などには触れず、外交的配慮を加えて日ソ関係一〇〇年の歴史を総括し結んだ。

次のセッションでは「過去の教訓と未来への展望」をテーマに、ロシア科学アカデミー東洋研究所コンスタンチン・ジュジュトフ氏の「エミール・ドイロン、ジョージ・ケナンの日露関係」、サルキノフ教授の

「二一世紀における日露関係の新地平」が、また、ケンブリッジ大学講師フィリップ・トウル氏の「ポーツマス講和再考」が発表された。そして、最後に保坂宗子氏による「曾祖父の生き方と私」、小菅信子助教授の「グローバル化時代の日露和解」の発表があり、最後に帰国早々のパノフ元駐日大使の「日露関係の現状と将来」に関する講演があり会議は終わった。

会議に参加しての所見

この国際会議の特徴は単に学者による論文の発表や討議にとどまらず、日露の和解を前面に東郷元帥の孫孫である保坂宗子氏、「三笠」保存会副会長の沖為雄氏などを加え、「日ソ和解」の各種の行事が会議と平行して行われ、それがこの会議の「日露和解」の深化という目的を大きく前進させたことである。ロシア海軍

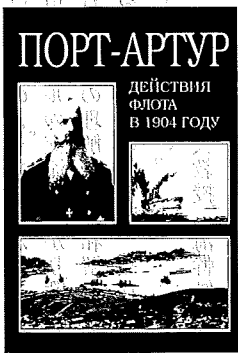


ニコライ教会大司教と保坂宗子氏

も海軍中央博物館では日露戦争百周年を記念した特別展示を行い、遺族や捕虜の子孫、特にロジェストウエンスキー中将の子孫も出席した。われわれも会議終了翌日に日露戦争で戦死したロシア将兵を祀るニコライ

教会（日露戦争の戦死者のために一九〇七年に建立）の慰霊追悼ミサに参加し、また、海戦で沈没し生存者が殆どなかった戦艦「アレクサンドル三世」慰霊碑に献花した。ミサはニコライ教会の大司教が執り行い聖歌隊が合唱するなど荘厳に行われ、ミサ終了後に大司教が保坂氏にロシア式の親愛の頬付けを行うなど親愛の情を示した。

また、この会議にロシア側がいかに関心と熱意を示したかは、海軍中央博物館、記念艦「アウローラ」、社会思想史博物館、サンクトペテルブルグ大学などが協賛し、それらの機関を順番に廻って会議や行事が行われたことからも理解できるであろう。このように、この会議は日露親善に大きく寄与した。しかし、詳細に見てみると助成を受けたプロジェクトが「ポ



ツマス講和百周年、地政学時代の教訓と将来」と、日本側が学術交流と日ソ親善を第一とし、ロシア側は「不名誉な海戦」と位置づける日本海海戦に触れることを避け、ロシア海軍中央博物館の展示も、記念写真集も「日露戦争と旅順のロシア海軍の戦闘」（右写真）と旅順を中心とするものであった。未だロシア海軍には日本海海戦を歴史の中に入れるのには抵抗があるのかもしれない。しかし、歴史を通して日ソ関係の和解と親善の深化を求めるならば、会議で日露戦争だけでなく、第二次

世界大戦末期のソ連の不法な対日参戦や、国際法に違反して六二二万名もの兵士を長期間抑留し、六万二〇〇

〇名が生命を失い、未だ一万三〇〇〇名の死亡も確認されていないシベリア抑留の悲劇や、日本の降伏文書調印後にも進撃を続



スピーチを行う保坂宗子氏
右側の二人が口提督の曾孫兄妹

け、ソ連軍が停戦したのは日本固有領土の国後島や択捉島を占領した九月五日であつた事実などにも触れるべきではなかつたか。
しかし、日ソの和解を重視したため日露双方に、そのような雰囲気はなかつた。最後のセッシヨンでパノフ元大使が、「沖繩の米軍基地はアジアの平和に有害であり、日本は米国から自立し国境を接する日中ソなどの近隣諸

国との親善を重視すべきである。日露間には平和条約も締結できず領土問題もあるが平穏である。しかし、親密ではない」と締めくくつたが、これが日ソ関係の現実かも知れない。
しかし、この会議が行われていたときにモスクワでは、知られざる自国の暗い歴史の一部を学んで未来に役立てようと、国立東洋学研究所の学生が「シベリア抑留写真展」を開催していた。また、サンクトペテルブルグ大学の講演後に、日本語を勉強するようになった動機を尋ねたところ、十一名の学生中三名が日本に住んだり、日本を訪問したことを挙げた。このようなことから、日露の市民レベルの交流が広がり深まれば、日ソの真の理解が進み和解へと連なるかも知れない。また、それを願つて筆を置きたい。

(元防衛大教授・海幹候八期)